
ある非日常の日常

零崎 黒識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある非日常の日常

【Nコード】

N8688Y

【作者名】

零崎 黒識

【あらすじ】

ある事情のある少年、朝霧海斗はある人に拾われて桐咲学園に入学するも1年でやめることに。その日、誘拐事件に遭遇する。海斗は、非日常を求めて、その事件を解決しようとする。そこからつながる物語。

非日常の始まり（前書き）

初めての投稿デスので、至らないことがあると思いますが暖かい目で見守ってください。（ペコッ

非日常の始まり

目を開けるとあたりは暗闇だった。

周りを見てもどこもかしこも暗闇、暗闇、暗闇。
匂いは、何か分からない血の匂い。
部屋のような場所なのか外なのか分からない。
手には、一丁の拳銃。

ああ、意識がやっととはつきりしてきた。
足元には前はヒトだった塊があった。
そうか俺は、ここであいつを……

「……と・いと・海斗、海斗起きるもつそろそろ時間だぞ。」

と同室の小楠環おくすたまきが話しかけてきた。

「あと五分ほどで起きる。」

「起きているじゃないか。早く起きないと遅刻するぞ」

「ああ」

しかし久しぶりにあの夢を見て起きる気になれないし、今日は、終業式であるため出なくてもばれないだろう、ばれたとしても進級する気はないしな、と考えていると。

「今日はさぼるなよ、終業式、出ないと進級できないぞ。」

心の中を読まれたように、先回りされた。

「チツ、分かったよ。」

仕方なく体を起こし、朝食等を素早く済ませ、壁に掛けてあった制服に袖を通した。後これに何回袖を通すのだろう、と考える、制服のポケットに入っているこの紙を、あの校長に出せばもうこの場所には用はなくなる。本当にあと何回だろうな、とか考えていると。

「用意ができたなら行くぞ。君のせいで私まで遅刻してしまいそうだ。」

と環は困った顔をしていた。

だったら待っていないでもいいのに、と思いながらも

「もういいぞ、じゃあ行くか。」

環よりも先に部屋を出て行った。

私が待っていたはずなのだがな、とぶつぶつ言っている環をほって学校へ向かった。

ここは学校の寮だから、歩きで学校まで15分とすぐに着く。

そして学校の校門まで来た。しりつきりさきがくん私立桐咲学園、ここは普通の学校と違

いお嬢様学校である。では何故俺みたいな男が居るかというと、そこがほかの学校とは違い、この学校のお嬢様を守るボーディーガート養成学校である。しかもその男たちはほとんどの生徒がお金持ちや、家族代々この学校の出でそのため入ってきた等の理由でいる奴らが多い。しかし俺は、お金持ちでもないしましてや家族がこの

出ですらない、むしろゴミのような存在だ。そこまでもないか。まあいい、だからここには普通の奴は近づかない。

学校内に入り中庭に出ると、変に捻っていないふつうの学校にはない清潔感でいっぱいである。緑が生い茂り、しかしどこも汚れていない。さすが一流学校である。

敷き詰められている石は一つ何万以上するらしく、持っていこうとするここはいたるところにある監視カメラで監視されており見つかりと捕まってしまう。

まあ、ほとんどがお金持ちであるためそんなことをする奴なんかいるはずがないだろうが。

「あれ？海斗じゃん。意外と早いお付きで。」

「ああ、環のせいだな。もっと寝ていたかったが。」

「まあ、そうだろうな。ほとんど時間ぎりぎりで教室に入ってくるし、でもその割に焦って入ってこないから狙ってやってるのかもな。その辺はどうなんだ？」

「そんなわけねえだろ。偶然だ、偶然。」

「ふーん、まあそういう風にしといてやる。」

話しかけてきたのは、みなかわゆうき皆川侑祈、同じクラスメイトである。

こいつは他の奴とは違いロボットである。どっかの金持ちがすべての技術を駆使して作り上げたいわゆる“最高傑作”だそうだ。

しかし、殆ど人間にしか見えない。普通に食事もできれば、排泄もするし、睡眠もとる。人間より人間に見える。さすがに、力は人間以上であるため制限してるらしいが……。しかも侑祈は自分が口

ボットであるとは思っておらず人間だと思っている。

そんな風に脩祈のことを思っていると、

「なあ、今日、発表される日だよな。」

「・・・何の？」

「恍けちゃって、これからボディーガードに就くお嬢様だよ。」

「ああ、そんなことあつたけ。」

「就くなら、かわいいお嬢様がいいよなあ、なんなことやこんなことできるかも知んねえぞw」

「おい、音声拾われてたら、終わりだぞ。そんなこと言ってる」と

そう、この学校は1年間は、ボディーガードになるための訓練等を受けて全校200名の中で上位40人が進級でき、2年になってお嬢様のボディーガードに就く仕事を課せられる。そしてこの終業式の日、つまり今日の、進級する40名にお嬢様の名前が発表される。決まらない奴もいつらしいが、新学期が始まるときに発表される。さっきバカ（脩祈）が言っていたが、お嬢様に手を出すこと厳禁になっている。ましてや恋愛関係になっちゃったら社会的に排除されてしまう。

「大丈夫、大丈夫。俺はもうお嬢様決まってるし。」

「ああ、原屋敷のお嬢様だっけか、・・・こんなロボット作らなくとも普通に人間を就ければいいだろうに。」

最期は聞こえないぐらいの声で呟いた。

「なんか言ったか？」

「いや、なんでもない」

「あ、もうそろそろ終業式が始まるぜ、早く講堂に行くか。」

「ああ」

環は先に行つてここにはいなかったが、先に行つただろうつから気にはしないが、

二人は講堂へ向かった。

就職先

侑祈と二人で講堂の中に入ると、すでに、進級する生徒はほとんど揃っていた。

ちなみに進級しない160人もこの終業式に参加する。当たり前に参加すると思われやすいが、この学校は特殊であり、40人しか進級しない。だから他の奴は、進級できない。やりなおすと選択肢があるがあるが、しかし、その奴らのほとんどはやめていく。40人に入れなかった時点であきらめるか、親が許さないかの理由でやめる。まあ、稀にそのまま残って入った1年とがんばるやつもいるらしい。

席まで行くと、

「また、遅刻ギリギリでの到着か。しかし、よく進級できたな。貴様のような分からん奴が進級するなぞ思わなかったぞ。」

と、嫌味を言ってくるこいつは長谷部嵐^{はせへあらし}、代々この学園出らしく、しかも金持ちときたまじめ君である。

「わるかったな、俺が進級して。」

「ふん、せいぜいお嬢様に捨てられないようにするんだな。」

そんなことを言ってるやつをほっておいて自分の席に向かった。

「私と一緒に来たのになぜぎりぎりに来るのやら、しかも侑祈が居

ながら。」

と呆れた顔をした環が居た。

「侑祈がトイレに行つてて踏ん張ってるのを待つてたら遅れただけだ。」

「おい、嘘いつてんじゃねー」

と隣の侑祈が突っ込んできたが無視して席に着いた。

座つてすぐに終業式が始まった。

終業式が終わり、進級する生徒だけ教室に呼ばれた。
理由は、これから就くお嬢様の話である。

クラスでは、話してるやつもそこそこいて、俺の周りには、環、侑祈、嵐が居た。

「なあなあ、お前らつてどのお嬢様に就くのかね？」
と侑祈が聞くと

「ふん、僕は当然鳳凰家の長女、朱里様が当然だな。」
と嵐が言った。

しかし、俺には鳳凰家と聞いても分からなかった。
「鳳凰家って何だ？」

と聞いてみると、3人から呆れた顔が返ってきた。

「鳳凰家のことも知らないのか。この日本のは殆どの実権を握っている財閥だぞ。ほんとに知らないのか？」
と聞かれたが

「全く知らん。殆ど興味がないからな。」

「まったく、本当によくこれで進級できたな。」
と嵐は呆れていた。

「でもよ、その長女ってあの噂があるじゃん？」
と侑祈が言ってきた、

「あの噂？」

「おう、その噂とは・・・」

と聞こうとしたとき、教官が教室に入ってきた。

「お前ら、早く席につけ。HRを始めるぞ。」
みんなが話をやめてそれぞれの席に着いた。結局噂の話を聞けなかったのと思いながらぼんやりとしていた。

「起立、礼。」

嵐が号令をかける。

「うむ、ここにいる40名が進級することを心から祝福する。だが、これからはお嬢様の命を守るボディガードとして生きなければならない。お嬢様の危険にはどうするかを考える。そうだな嵐答える。」

指された嵐は、ハイと答え、

「我々、ボディーガードの役目はお嬢様の命を自分の体を盾にしても守り抜くことです。」

「お嬢様に銃を向ける奴がいたら？」

「お嬢様に前に立ち体で守ります。」

「自分が死ぬかもしれない、躊躇することはないか？」

「いえ、我々は、お嬢様の命を守るためのものであるため恐怖を抱きません」

と教科書通りの答えを嵐は答えた。他の生徒もうなずいていた。が、俺は何もしなかった。そのことが教官に見つかり、

「嵐、もういい。朝霧お前はどうか？」

と聞かれた。

素直にうなずいとけばよかったと、思いながら、席を立ち

嵐が言ったことを、繰り返した

「我々、ボディーガードの役目はお嬢様の命を自分の体を盾にしても守り抜くことです。」

「お嬢様に銃を向ける奴がいたら？」

「お嬢様に前に立ち体で守ります。」

「本当にそうか？」

「・・・・・・・・・・」

「もういい。もう少し自分が今から就くことを考えてくれ。」
と教官も、他の奴らも呆れた顔をしていた。

「さて、意識を確認したが今から就くお嬢様の発表を行う。まず主席長谷川嵐」

ハイと嵐は席を立ち教官の前まで行った、

「お前は、主席と言うだけあってそれなりに高い位の人に就いてもらう。」

「それはもとより覚悟をしております」

「そうか、では発表する、新学期からお前が、就くお嬢様は鳳凰家の次女、鳳凰彩に就くことを任命する。」

そう、教官が言うと、嵐は「えっ！」とろたえ始めた。
周りもざわめいていた。

「彩様ですか？ 朱里様ではなく。」

「そうだ」

と教官は答え

「あの噂は本当だったのか」

と嵐は神妙な顔をした。しかし教官がお前は噂なんぞを信じるのかと聞かれ、慌てて訂正をしていた。

「なあ、噂って何だたんだ？」

と隣の侑祈に問うと、

「朱里様は自分の周りにボーディーガードをつけないという噂だ」

と答えてきた。

ふむ、そのお嬢様は、人嫌いなのだろうかと思つた。
そして

「次、小楠環」

と環が呼ばれた。環も嵐に習いハイと答え、席を立つた。その間に嵐は自分の席の戻つて行つた。

「環お前は1学年上の神埼萌に就いてもらう。」
周りがさらにざわめき始めた。

「本来なら、同じ学年のお嬢様に就けるのが普通なのだが、少し事情があつてな」
と言ひ

「いえ、守ることに変わりがないので」
と環は答え、自分の席に戻つて行つた。
そうして他の人も呼ばれていった。

.....

「次、皆川侑祈」

「はいよー」

と気の抜けた返事をして前に出て行つた。

「お前は、前からわかつていたと思うが・・・」

「ああ、妙ちんでしょー、りょうかーい」

「主人をそんなふうに・・・まあいい、粗相のないようにな」と教官も諦めて言い放った。

侑祈は何も気にしないふうに、席にもどっていった。

「最後に、朝霧海斗」

「ああ」

と気だるそうに答えて、教官の前まで行った。

「お前の就く相手はまだ決まっていない。新学期まで期待してくれ」

と教官が言ったが

自分は内心ホッとしていた。

「決まってるのか」

と嬉しそうな声音で行ったのが教官に聞こえて怪訝な顔をされたが自覚をもうちよつと持ってくれ、っと言って終わった。

「今日、決まった者も、決まらなかった者も気を引き締めていくように。それでは解散」

と教官が言って教師から出て行った。

また、侑祈、環でこの後の話をしようとしたが、取り合えず教室を出るか、と言い出し教室を出た。

出た、すぐのところに嵐が居た、
「彩様か・・・」

「そんなに彩様がだめなのか？同じ鳳凰家だって言うのに」と聞くと

「朱里様と彩様とは全然違う、自分の出世も懸かっているからな、しかし朱里様より彩様のほうが扱いやすいから点数が加稼ぎしやすいか」

とニヒルの顔をしていた。

「まあ、環も大変だよな。学年上の神崎様なんてよ」と侑祈が聞いた

「まあ、大変だがそれだけ遣り甲斐がある。しかも剣の達人であるため技を見せてもらいたいしな」と環は嬉しそうに答えた。

「海斗は・・・？」

と聞いてきたので

「ああ、俺はまだ決まってないそうだ」

「ふん、お前なんぞつけるお嬢様が居ないのだろう。」

と嵐が嫌味を言ってきた。

そんなのを無視して

「この後お前らはどうする」と聞いてみたすると

「とくにやることがないから部屋に帰る」

「私も」

「俺もやることないけど、外に遊びに行くかな」

と三者三様の答えが返ってきた。

「海斗はどうすんの？」

と侑祈が聞いてきた

「俺はこの後用事があるからな先帰ってていいぞ」
と答えると、

三人は学校を出て行った。

「さてと、校長のところに行くか」
と校長室に向けて足を運んだ。

退学届

三人と別れて校長室に足を向けていた。
校長室の前に立つと、ドアを3度ノックした。
中から、誰だと聞こえた

「俺だ。海斗だ」

と言うと、入れと言われた。

校長室に入ると、目の前に椅子に座っている人と目があった。

椅子に座っているのは、校長 竹中巽たけなかたつみいわゆるこの学園の責任者である。

竹中は席を立ち、

「どうした、そんなところで立ってないで入ってきたらどうだ。話があるのだろう？そこにすわればいい」

と促した。

俺は、言われた通りに、中に入りソファーに腰掛けた。

座ったところで

「今日はどんな用だ？わざわざここまで来たのだから大事な話なのだろうが・・・」

と単刀直入に言われたので素直にポケットに入っているものを机の上に出した。

これは、と竹中は驚いた風な顔をした。

「これは本気か海斗？」

「ああ、ここに来た1年間はそれなりに新鮮だった。だがそれだけだった。やっぱり俺には合わなかった。だからこれを出しに来た。受理しといってくれ。」

そう、俺は退学届を出しに来たのだった。あそこにいた俺にはこの学園には合わなかったからだ。

「だが、この学園を出たらどこに行くつもりだ。行くところなどないだろう?」

「それは、自分で何とかする。学園を辞めるのに学園の支援なんか受けたくはないからな。自分の手で何とかするさ。」

「だが・・・」

「くどい、これは俺の覚悟だ。」
それを聞いて竹中は、黙った。

竹中は紙は持たないで自分の机まで行き引き出しからあるものを出した。

「これが、なんだかわかるか?」
と見せてきたのは、拳銃だった。しかも古いタイプのもだった。

「大人がそんなものを子供に向けて構えるなよ。」

「これは、今の日本では裏で流通しているものでありアンティークだが、引き金を引けば人は死ぬ。」

「物騒な世の中になった。だが、俺にそれを見せて何になる。」

「今俺が引き金を引けばお前は死ぬだろう。世の中などそういうものだ。誰かは誰かを蹴落として生きている。しかしお前は、その蹴落とした者と同じになろうとしている。才能があるのに、だ」

「俺には、才能などない、あるのは経験だけだ・・・あの汚い、な」と苦笑いながら答えた。

「経験があつたからこそ、お前はこの学園で進級することができた。それがお前に経験がなければ辞めてく側だったはずだ。その経験こそ才能というものはずだ。それをみすみす潰すのは大人としても学園の責任者としても見逃せない。考え直せ、海斗」と説得するように言ってきたが、

無言を貫いた。

竹中は、それを覚悟と見抜いたのだろう、それ以上何も言わず元の場所に座った。そして

「お前の意志は固いと見た。すぐに出て行けとは言わん。せめて2週間ある春休みだけでも寮で過ごせ。すぐだとあてなんてないだろうからな。それで覚悟が変わらなければ出ていけばいい。その時まではこの退学届は受理しない。わかったな。」

「ああ、分かった。すまないな。いままで世話をしてもらったのに、恩を仇で返すようなことをして」

「いや、こうなることはほとんどわかっていた。だからきにするな」と言つて、不器用な笑顔を竹中は見せた。

俺は、心の中で感謝して、校長室を後にした。

歩いて寮の自分の部屋に着くと、同室の環が出迎えた。

「遅かったな。何をやっていたんだ？」

「まあ、ちょっと屋上で涼んでた。」
とごまかした。

環は、ふーんといった顔で見てきた。

「何をしていたても、私には関係ないしな。それで海斗は、実家に戻ったりするのかこの春休みは？」
と聞いてきた。

「俺は特に帰ることはないからこのまま寮に残るが、環はどうするんだ？」

「私は、一応実家に帰りことの報告をするために一度帰る。」

「ふーん、そうか。そういえば、環は何故この学園に入ってボディガードになろうとしたんだ？」

「海斗は、同室になったときにもそんな事を聞いてきたな」

「あのときは、はぐらかされたがな」

「すまない、あのときは海斗のことをまだ信用できていなかったからな」

と摘まなそうな顔をした。

「ふーん、今は信用しているのか？」

「1年前よりはな」

「それは嬉しいこと」

とお世辞を述べておいた。

「それで？何でこの学園だったんだ？」

「私の家系は代々ボディーガードをやっているのだ。だから私がこの学園に入ることは必然でボディーガードになることもまた必然だった」

と打ち明けられた。

そうだったのか、と心の中で思った。

「海斗は何故この学園に入ったのだ？失礼だが、それなりの資本家にも見えないし、やる気がない風にしか見えない態度だったからな」

俺は無難に、詮索されないよう

「コネがあっただけど」

そっけなく答えた。さすがに環も詮索することがなくこの話は終わった。

次の日

「まだ海斗は寝てるのかよ、俺には深夜にたたき起してコンビニに行ってエロ本買ってこいとか、パシって寝不足にさせるのにな」

と侑祈の嘘の言葉を言っているときに目を覚ました。

だが、目を開けるわけでもなく、体を上げることはしないで少し話を聞くことにした。

「フン、いつもぎりぎりに学校に来てるから起きるのが遅いだけだろうがな」

と嫌味っぽい嵐の声も聞こえた。

「海斗は、普通はなおきがいいほうのはずなのだがな」と環が、神妙な声で呟いた。

「うつそだー、あの遅刻王の海斗が寝起きがいいわけがないじゃん」と侑祈がまた嘘を吐いた。俺は苛立って

体を起こし

「誰が、遅刻王だ。しかも誰がいつ、何時にお前にエロ本を買いに行かせたんだ？」

と侑祈に苛立ち気な声で言った。

「げ、起きてたのかよ。いやさっきのはだな・・・」

「スパイウェア」

「うぐっ！」

「ワーム」

「へぐっ！ー！」

「トロイの木馬」

「あぶぶぶぶぶぶぶぶー！ー！」
と侑祈は頭から煙を出した。

「その辺にしといてやれ、海斗。回線がショートするかもしれんぞ」

「そうかもな」

と環に言われて言うのを辞めた。

「てめー、海斗俺の嫌いな言葉ばかり並べやがって、こうなったら腕相撲で勝負だ」

「なんでお前と腕相撲なんぞやらなきゃいけないんだ。お前となんかやったら腕がもげる」

「地中深くまで持ってってやる」
と侑祈は言つてのける。

分かっていると思うが侑祈はロボットであるため、冗談に聞こえない。さっきパイウエアなどの言葉を侑祈に聞かせると、頭が拒否反応を起こしてショートするらしい。

「もとはといえば、おまえが嘘なんぞつくから悪い」

「痛たたたた、頭痛してきた、こりゃ腹痛かな」

「お前の頭と腹は、どうかしてるのか？　嘘をつくならもつとましな嘘をつくんだな」

「それは、置いといて。この春休みどうするみんな？」
と侑祈が聞いた。

「僕は、一度実家に戻ってこの結果を報告しないといけないからな」

と嵐が、

「私も同じようなもんだ」
と環が同じことを言った。

「なんだよー、つまんねーなー。じゃあ海斗と俺だけか。ここに残るのは」

「おい、勝手に暇人にするな」

「ひまじゃねーの？」

「暇だが」

「んーだよ、反論してんじゃねー」
と笑って侑祈が言ってきた。

「取り合えずここにいてもやることはないし、今から行かないといけないから失礼する」
と嵐が

「分かった。じゃあ侑祈外に遊びに行くか」

「りょうかーい」

「環はどうする？」

「私も今から行くから、二人で遊んで来い」
と環は言った。

「それで外に出てきたのはいいが、どこに行く気だったんだ？俺には行くところなんかないけどぶらぶらするために付いてきたが」

「んーおれもないじえ」

と侑祈、俺は取り合えず腹を殴つといた。

「痛つてー、ここで戦るか」

「馬鹿、外の戦闘はご法度だ。第一お前には勝てん」

「それだけだよー嵐や環には確実に勝てるんだけど、海斗はかてるかわからんだよなー100%つてわけじゃにんだよなー」

「買いかぶりすぎだ。戦闘順位35位だぞ」

「それだから確かめたいんだよー」

と侑祈は笑いながらそんなことを言ってきた。

侑祈が言ってることは分かる。俺は、侑祈のように強い、様に見せる。ハッターが他の奴らよりもうまいだけであつて、実際強いというわけではない。

「じゃーよーDVDショップいこーぜ」

「どこで見るんだ」

「視聴覚室」

「俺がやるのか」

「まあ、俺がやってもいいんだけど、跡が残るしなー」と侑祈が苦笑いした。

そりゃそうだ、ドアノブぶっ壊すんだから。その点俺のはピッキンだから分からないだよなあ。と思うながら二人でDVDショップに行った。

事件（前書き）

テスト中ですが、勉強をやる気分出ないので更新しようかなと。。。

事件

2週間後

朝

「海斗、朝だぞ。起きろ、どうせ起きているのだろう」といつものように環が起こしてきた。

「ああ、おはよう」

「おはよう、次は体を起こすんだ」

「そんなことは、聞いてないぞ」

「今言った」

「分かったよ」

「それでいい、今日から新学期だからな遅刻しないようにな」

「分かった。準備するから先行つてろ」

「分かった」

と環は先に出て行つた。

「さてと、もうここには用はないな。この制服ともおさらばか」としみじみと思いながら着替えた。

服装はここに来る前から持っていた真黒のスーツを着た。

そして、この部屋を出た。

部屋を出ると意外な人物が待っていた。

「校長・・・いや竹中か」

校長、竹中が居た。

「海斗、ほんとにここを出ていくのだな」

「ああ、それは変わらない。引き留めに来たのなら無駄だぜ。俺は出ていく」

「引き留めに来たのではない。これを渡そうと思ってな」と竹中は自分のポケットから封筒を取り出した。

「これは？」

と受け取ってみると、中には100万入っていた。

「ここに縛っていた迷惑料だと思って受け取ってくれ」

「いやいらぬ。余計な雑念を持っていくつもりはない」

「雑念？」

「この金を、使う度にあんたの顔を思い出すのは嫌だからな」

「そんな情の溺れるやつじゃないだろう？」

「・・・」

差し出し返すが、受け取ろうとしない。

「もうやった金だ、捨てるなり焼くなり好きにしろ」

「あんたも変わってるぜ」

と言つて俺は、中から1枚だけ取り出した。

「1枚だけ貰う、それだけで勘弁しろ」

「・・・・・・・・・・」

「あんたが受け取らないならここに置いていく」

封筒を床に置いた。

「海斗・・・俺は・・・」

と何か竹中が言おうとしていたが無視して出て行った。

さて、これからどうしようか。

臨時収入・・・といっても1万円しかないたらこころ辺には住めないだろうからな。取り合えずここから離れようと思っていると、自販機が目についた。

別にこの1万円でジュースを買おうとするわけではない。

万札は自販機では使えないしな。考えたのは、別のことだ。

オレはポケットから、愛用のものを取り出した。

そんな時だった。

平穏な街並みに見える景色。

そこに浮かぶ異様な光景。

「くっ・・・離せこのバカ者が！」

「早く押し込め！邪魔が来るぞ」

黒光りするバンに押し込もうとする複数の男。

それも夜間中ではなく真昼間から。

よつぽどの大物か・・・ただ単に手柄に焦ったバカか。

男を観察すべく視線を送る。男の二人・・・顔が濃いな。いやそんなことはどうでもいい。

人生で一度お目にかかれるかどうかの、誘拐現場。

しかし、行きかう人々は誰も止めに入らない、入れない。

一般人なら、ただ啞然と誘拐現場を見つめているだけだろう。

屈強な男たちが躍りかかって、助けようもしない。

それが、現実。人のあるべき姿なのだ。

「軽々しく・・・私に触る、な！」

冷静に観察している間にも、少女の身は危険にさらされていた。

「半殺し程度で済むと思っていたら、大間違い・・・！」

現状に怯まず、抵抗を見せる少女。

その姿は学生服、それもよく知った制服だった。

「うるせえ！」

飛び交う罵声。そして、一方的な暴力。

「くあっ！」

小さい悲鳴とともに、少女の頬は、赤くなった。

「これ以上痛い目見たくなかったら、さっさと入れ」

このまま見逃せば、何かが消える。

彼女を取り戻すための巨額の大金。

それか、彼女の命が。

少女はバンの中に消えてく。

あと少しでいつもと変わらない日常に戻る。

予め、言っておく。俺は周りの自己保身に走る人間と同類だ。だが、俺は駈け出した。なぜ？かと聞かれたら真逆だからだ。日常からかけ離れた非日常。俺は求めていた。俺はバンを掴む。だが、急発進した車を掴みきれなかった。倒れながら、バンのナンバーを頭に叩き込む。

「何か追いかける手段はっ・・・」

近くに自転車置き場があった。

「緊急だつてことにしておくかつ！」

ポケットから愛用の相棒を取り出して1秒ほどでカギを解除。

「少しの間、借りるぜっ！」

束縛から解放された自転車に跨り、バンを追いかけるために全力でこぐ。

「親分、少しいいですか」

「なんだ？くだらない事だつたらぶつ殺すぞ」

「実はさっきから、チヨロチヨロと自転車が追いかけてきてるので
すが？」

「自転車が？ただの新聞配達だろ。気にするんじゃないね！」

「そつだといいんですが・・・」

「さつさと手錠をしろ！」

「うつ・・・くつ・・・」

「大人しくしている」

「はあーはあーはあー、くそ追いつかないか。多少の無茶も、やむなしか・・・」

近くを通っている車の横に着いた。そして、その車に飛び乗った。

「うわあ！な、何だ？」

「おい、前のバンを追え！」

「はあ？何言つてんだお前。何で上に乗ってんだよ！」

「煩い。殺されなくなかった、追いかける。行け！」

「ああもう！ どうなっても知らねえぞ！」
と自棄になった車の男は追いかけて行った。

「すみません、親分」

「ああ？なんだ、またなんかあんのか？」

「いえ、さつきから後ろから変な青年が車のボンネットの上に乗って追いかけてくるんですが」

「それが何だつていうんだ」

「追っ手ではないかと」

「そんなわけねえだろ、ちゃんと見張っている」

「は、はあ」

誘拐した奴は、人気のない道を選んですんでいた。そして、最後に着いたのは、さらに人気のない倉庫だった。

「はあ、はあ、はあ、も、もう無理。」

「よくやってくれたよ」

「へ、へ。それでも昔は、ブイブイ言わせてたんだぜ。でももう無理。帰るときまで起こさないで・・・」
と車のおやじは気を失った。

「ありがとよ」

と告げて倉庫に歩いて行った。

明かり一つ差し込むことのない、隠れるのには持つて来いの場所だ。男たちは、一斉に降りると、少女を引きずり出した。

手首は手錠で止められ、口はガムテープのようなもので止められている。

「やりましたね、親分。あの鳳凰家ですよ!」

「騒ぐんじゃねえ。番号は控えてあるな」

「ハイ、ここに」

「シーシー!」

「まだ、抵抗するか。だがこの煙草の火でも押しつけければ、少しは大人しくなるか」

と親分らしき男は、吸っていた煙草を少女の肌に近づけて行った。

「・・・・・・・・」

「ふん、恐怖で何も言えないか」と親分は満足そうに笑った。

俺はその少女は恐怖はしてない、と思った。親分が近づけるのは分かっていたが、付けないと分かっていたから動かなかったように見える。

少し親分がそっぽをむいたのを見逃さず、少女は、手首を留められているのにもかかわらず、男を突き飛ばして、駆け出した。

「この餓鬼！」

と親分は懷から今は普通に流通してしまっている物を取り出した。

このまま、見ていれば少女は死ぬ。ここでヒーローのように颯爽の登場・・・そんなことをすればすぐにお陀仏になってしまう。

幸い、少女はこっちのほうに走ってきた。だから脇を抜けようとする少女を自分側に引き寄せた。

「!？」

刹那の差、少女がそのまま走っていたら、頭に当たる位置に玉が飛んで行った。

「なんてことをしてんだ！大事な商品だぞ！」

「す、すいません。でも今の見ましたか？」

「ああ、鼠がいるらしい」

「ん、んっ！」

少女が唸る。

「ちょっと黙ってろ」

少女の口に付いているガムテープを外す。

「あんた、誰よ」

「ただの通りすがりの一般人だ」

「一般人がこんなことしない」と少女が言った。

そりゃそうだ、こんな危険なところに来るなんて普通の人だっただけだし、警察呼んでハイ終わりで済ませるだろうしな。

「とにかく、ここから逃げるぞ」

「そうねって言うてもこれがあるからうまく走れないんだけどね」と少女は、手錠を掲げた。

俺は、ポケットから愛用のものを取り出した。

「何それ？」

「ピッキングツールだ」

「は？そんなもので外れると思っっているの？」

と少女は言っていたが無視して手錠に手をかけた。

「触る・・・な！」

「いいから黙ってろ」

1秒ほどで解除した。

「よし、逃げるぞ。早くしろ」

「だから、これがあるからっ・・・、どうやって外したの？」

「だからこれで外した」

と言ってポケットにピッキングツールを戻す。

「変わった特技を持っているのね」

「履歴書に書いて言われたこともある」

と苦笑いした。

「そこにいるのは、誰だ？お譲ちゃんだけじゃねえな」

と親分が言ってきた。

「・・・・・・・・・・」

「俺らがおとなしいときに出てこないと、いつの間にか死んでるかもしれないぜ」

と脅してきた。

「これからどうするのよ。銃さえなかったら男の一人ぐらい倒せるけど」

と少女は言ってきた。

「頼もしい限りで」

「ここまで来て、逃げるための方法を考えてないなんて言わないよね？」

「ちょっと、な、なんで目を閉じてるのよ？」

足音がこっちに歩いてきた。10・9・8二手に分かれた。5・4・3・2近くに一人、少し遠くに二人か。

「俺が、囷になるから、出口まで行け。そこに自動車の中でぐったりしてるおじさんが居るから、そいつを起こして家に帰れ」

「へっ？」

少女の返事を聞かず飛び出した。

近くにいた男の腹を殴り、腰を曲げたところで首筋を狙う。男は気を失い地に倒れた。

少女は、驚きながらも出口へ駆け出した。

「な、なんだお前は！」

「こっちは、ガキを捕えます。親分は少女のほつを」

「そんなことができるのか？」

俺に振りかぶってきた拳を交わしカウンター気味に殴ってきた男の

顎に拳を叩き込んだ。それにより殴られた男は、宙に舞った。
親分は啞然として、懷から出した銃の引き金を満足に引くことができない。

「お前ら悪党に向いてねえな」
と笑顔で親分に言つてやった。

「な、なんだと！てめえぶっ殺すぞ！」

「その引き金を引けるのか？小物の悪党のくせに。人殺したことねえだろ。この世の中には、銃を見せてビビってもくれない奴だっていることを、覚えておいたほうがいいな。」

「くそっ！舐めるなあ！」

「遅え」

親分に走つて近づき全力で殴ることもなく、地に崩れ落ちた。

「ふう」

学園での1年間、手を抜いていたから体が、興奮している。さっきのやり取りを見てる奴がいたらどっちが悪党なのか分からないと言つていただろう。

「さて、」

まだやっておくことがある。スーツに被ったほこりを叩きながら近くにあったガムテープを取った。

外に出ると少女は待っていた。

「あいつらは？」

「倉庫の中で小寝んねしてる」

「あいつらを、あんたがやったっていつの？さすが桐咲学園のボディーガードね」

「なんだそれ。わけ分かんねえ」
「なんで、ばれたんだ。」

「それは？」

と少女は俺の手に持っているものを指差した。

「弾薬」

と言つて海の方へ投げた。

「何で、拳銃ごと捨てないのよ？」

「見つけた時に、決定的な証拠が見つからない。後こいつと俺は、鞆を渡した。」

「私の・・・鞆・・・」

「中のものが無くなってないか確認した後、警察に連絡しろ」

「分かったわ」

「おっさん起きてくれ。あと少し付き合ってくれ」
と気を失っているおっさんを起こした。

「このあたりでいいか？」
とおっさんが聞いてきた。

「どうだ？」

「・・・悪いけどそこを右折して」
と指定してきたのは右折した先は最警備区域だった。一流の資本家
たちしか住んでいない場所であって警備も厳しい場所である。

「でも・・・そこは・・・」
おっさんも困惑顔で尋ねた。

「大丈夫、私が居るから大丈夫」

「こいつは、桐咲学園のお嬢様だ。大丈夫だろう」

「ああ、そうか。だからどうかで見たことのあるような制服だと思
ったら」

と納得していた。

・・・

「ここでいいわ」

と少女が言ったのは、桐咲学園に負けないぐらいの大きさはあるよ
うな豪邸の前で止めさせた。

「ありがとう、あんたもここで降りるのよ」

「何でおれまで降りなければならん。おっさんに他で降ろしてもら
う」

「学園のボディーガードがさぼっていいのかしら？」

「・・・分かった」

と顔を顰めながら車を降りた。

「あんちゃん、立派なボディーガードのなるんだぜ」といつておっさんは、帰って行った。

「それで、何が要件だ？なぜ俺があ学園のボディーガードだと思つた」

「勘よ。それに若い男がスーツを着てるのにも疑問だし」

と勘だが、的を射ている言葉に驚いた。顔には出さなかったが。まあ、俺見たいのがスーツ着ているのは不自然かもしれない。だから素直に白状した。

「・・・確かに俺はあの学園にいた。だが、・・・元が付く」

「退学届を出したって言うの？」

「そういうことだ」

「理由は？」

「理由？」

「ああ、いいわ。関係ないわ」

「そうだ、お前には関係ない」

「そういうわけじゃないはよ」

といっておもむろに少女は携帯電話を取り出して、電話をしだした。

「ああ、竹中、私よ」

竹中ってあの竹中か？

「少し前に退学届を出したバカが居ると思うんだけど？」

「おい。バカは俺のことか」

「静かにしなさい。あんた朝霧海斗って言うの？」

「おい、なに名前を聞き出してるだよ」

「そいつの退学届を破り捨てておいていいから」

「・・・なに？」

「意味は分かるでしょ？バカじゃないんだから」

「意味分かんねえよ。いったい何を考えているんだ」

「あんたに決めたわ」

と少女は涼しげな表情で行ってきた？

「決めた？」

「あんたは今から——」

とまた涼しげな表情をして、有無を言わせないような笑顔で、

「私のボディーガードよ」

俺が望んだ非日常とは違った日常が始まろうとしていた・・・

強引

「・・・なによ」

と少女が聞いていた。

なによじゃねえよ。何勝手に学園の退学届を破棄させてるんだよ。しかも竹中を知ってるのか。しかもなんであいつはこんな奴のことの要件を聞いたんだ？などの疑問などが頭の中でぐるぐると回っていたが、

「・・・さて、帰るかな」

この場から去ることを優先した。が、

「・・・痛つてえな。叩くな」

少女が頭を叩いてきやがった。小さいのによくここまで飛んだな、とか思っている

「あんだ、なんか私のこと小さいと思ったでしょ」

と心の中を読んだかのように、不機嫌な顔で睨みつけてきた。

「・・・いや、よく飛んだなあと、いつてっ」

すねを無言で蹴られた。

「それで、私のボディーガードになるの？」

「ならん。何でやらなきゃならん。赤の他人だろう、しかも名前がわからん奴には就かん」

「そうよね、私は鳳凰朱里、鳳凰家の長女よ」

正直驚いた、こんなちんちくりんが嵐が就きがっていた奴なんて、あいつってロリコンの気ってないよな、とか思った。

「なんで、俺なんだよ。俺よりも腕のいいやつはごまんといるだろうに」

「ごたごた、言っでないで私の物になりなさい。返事はハイかYESよ」

それはどちらも引き受ける形になるではないか、どんだけわがまま女なんだ。

「・・・埒が明かないわね。竹中取り合えず私の屋敷に連れてきて」

「・・・畏まりました、朱里お嬢様」

と後ろから野太い声が聞こえてきた。

「こんなところにいいのかよ。学園の校長がよ、しかもこんな奴にこき使われて平気なのかよ」

と竹中に聞いたが

「竹中は、私の父のボディガードよ。若者の育成も任せてるの」と朱里のほうที่答えた。

「ということだ。しかし驚いたぞ、いつもは授業とかを力を抜いてやっていた海斗が事件を力づくで解決するとは。しかもそれが朱里お嬢様とはな、お前にもボディガードの自覚ができたのか？」と嬉しそうに、竹中が話しかけてきた。

「そんなわけで助けたわけじゃない。日常じゃないと思ったから首を突っ込んだだけだ。」

「それでも、解決までするとはすごいことだ。」

「そこらへんにして、早くそいつを連れていくわよ」

「はい、海斗はいい物件ですよ。私でも手を焼きますが」と竹中は言いながら海斗の肩を掴む。

「離せ、俺は一人で十分だ」

と言つて竹中の手から逃れようとするが、バチツと音がしたかと思うと体に力が入らなくなった。

「くそ、スタンガンなんか使いやがって」

意識が朦朧とする中、必死に抵抗するがすぐに意識が消えた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「すごいね、こいつ」

と私は思った。竹中がいつも持っているスタンガンは、普通の物と比べ物にならない位の出力の物のはずだが、それを受けても動くことができないとは驚きだった。

「こいつは、学園では手を抜いていましたが実践のほうはなかなかの実力です。お嬢様が気に入るのもうなずけます」

と竹中が自分のわが子のように自慢顔で言ってきた。

「まあ、いいわ。取り合えず屋敷に向かうわよ」

「分かりました」

と海斗を担いでいる竹中を後ろに屋敷の中へ入って行った。

契約

「……ん。ここはどこだ？」

「やっと起きたね。海斗」

と頭の上から声が聞こえた。

そうだ、俺は竹中にスタンガンで捕まったんだ。それよりもどこだここ。俺の家じゃないし、さっき捕まる前に朱里が家に連れて行けと言ってたような。

と、さつきから無視して周りを見ていた俺に苛立ったのか、脛をガシガシ蹴られた。

「いつてえな、蹴るなよ」

「この私を無視するなんて言い度胸ね」

「うるせえ、無理やり連れてきた奴に言われたくねえな」

「あんたが私の物にならないから悪いのよ。しかもまだお礼もしていないのに」

「だったら、お礼は俺をボディガードにしないことだ。それならお礼を受けてやる」

「それとこれは別の話よ。何が不満なのこの私のボディガードになることが。自分の家のことを自慢するわけじゃないけど、金持ちだから給料だって他よりも多いはずよ」

「不満か……まずボディガードになることすべてが不満だ。自

分のことで一杯一杯なんだよ。それなのになぜ他の奴も守らんといけない？そんな奴に守られても不安なだけだろ」

「あなたは一杯一杯に見せているだけ。他の人とは違う何かを持っているはずよ。」

「・・・何故そう思う」

「勘よ」

とさざりと言つてのける。

何故、俺にこんなに執拗にボディーガードになつてほしいのか分からない。あの学園のお嬢様ならボディーガードになる奴の成績とも知っているはずだ。

「おまえ、俺の成績知っているだろ？」

「ええ知っているわよ。クラス内で40人中35位。でもそれがどうしたの？そんなもので決まらないはずよ。今回のような事件でいつも道理に動ける人なんてあなたのクラスの中に何人いるのでしょうね。私は成績で人を決めないの。あなたのように事件とかのときにすぐに動ける人のほうが近くに来てくれたほうがいいの」

「・・・お前なんかあるな」

「どういうこと？」

「確かに俺みたいになふざけたボディーガードは少ない。だが、臭うんだよ。他の企みが」

「あんたの気のせいよ」

「・・・どうかな」

「くだらないこと言っていると、またこれをくらわせるわよ」
と朱里が出したのはさつき竹中に気絶させられたスタンガンが握られた。

俺は気絶させられたときに手首をロープで縛られていた。

「脅すとき、どういった手口で脅すかは重要だ」
と俺は、不敵な笑いを浮かべた。

「なによ」

「拳銃なんかで脅すより、首筋にナイフを当てて傷をつけてやるほうが遙かに恐怖を煽る」

「この際スタンガンを使うのは悪くない」

「一度気絶させたものならなおさらだ」

「しかし無防備なのはイケないな」

「何よ縛られてる癖に」

「こんなものはどうにだってなる」
俺は手を伸ばして、朱里の手を掴む。

「あっ・・・!」

「こんな縄で捕えられるとおもつなよ」

「は、離さない!」

「ああ、離してやるよ」

と朱里の手を離れたすきに扉まで走った。

入口は連れてこられたときには起きていたから分かる。

「じゃあな」

「ぐあああ!」

「言ってなかったけど、その扉は認識されてない人が触ると電流が流れるの」

「ぶっそうな」

「そしてカギがかかるの」

ガチャンという音が扉から聞こえた。

「あんたは私のボディガードになる運命なのよ」

「セキュリティのおかげだろ」

「条件をのんであげるから、言ってみなさい」

「生憎、俺には欲がない」

「うそつき」

いや待て。

これを利用すれば、ここから抜け出せるかもしれない。

「なんでもいいんだな。本当に？」

「ええいいわよ」

「無理と言っなよ」

「いいから言いなさい」

「俺に一億積み」

「・・・・・・・・」

「今、ここでキャッシュで、だ」

「・・・・・・・・」

「無理なのか。なら、当然だが断るぞ」
黙りこむこと1分

「墓穴を掘ったわね。後悔しないでよ」

「それは、俺のセリフだ」

「時」

「はい」

一人のメイドが屈強な男を連れて入ってきた。
男は、ケースを俺を突き付けてきた。

「なんだ・・・うわ!」

「約束通りに、1億積んだわよ」

「は？」

「ねえ、時？」

「ハイ・・・1億積みました」

「一生、縛るわけじゃないわ。せめて卒業まで私に仕えて。あなたとだったらやっていけそうなのよ」

「・・・」

「人が頼んでいるんだから、一発でサインしろ!」

「いつてえな!」

「どんな退屈な日常を送ってきたのか知らないけど、私となら退屈させないわ」

「変わってるぜ・・・あんた」

「あなたほどではないわよ」

「ボディーガードになりたくないのに何でやらんといけんだ。俺はやらないぞ」

「・・・ならあんたに聞くわ」

「なんだ？」

「何であの時に私を助けたの？」

「一般人だつたら一般人らしく傍観しとけばよかったのよ」

「誘拐された奴が言うなよ」

「誘拐されるのと助けられるのは違うのよ」

「あれは・・・」

「中途半端な正義を振りかざしといて、はい興味がありません？ふざけんじゃないわよ！」

と朱里は胸倉を掴んできた。

「私は誰にも頼らなくても生きていける」

「今までそうしてきたし、やってこれたの」

「・・・」

「でもその心情を打ち砕いたのがあなた」

「それでどうするの？やるの？やらないの？」

「俺は・・・」

呆れて、意図せず深いため息をついた。

気のせいか、朱里の顔が今までにない強張った気がする。
誘拐のときにも見せなかった、不安に秘めた目をしていた。
だが、それも一瞬。何もなかったように凜とした顔に戻った。

「少しだけ、付き合ってやる」
自分でも分らない。

もともと、これからのあてがなかった者なのだ。
少しぐらい立ち止まってもいいだろう。

「引き受けてやるよ。……ボディーガード」

「……そ」

返ってきた声はそっけなかったが

「がんばりなさい、海斗」
今まで見れなかった笑顔を見えたからよしとするか。と自分に言い聞かせた。

姉妹

ボディーガードを引き受けた後、朱里は部屋を出て行った。
俺はというと、メイドに連れられて今日から自分の部屋になるであろう部屋に連れてかれていている。

「あなたの部屋へと案内します」

「・・・時と言ったつけ？」

「はい。名前は時です」
とそっけなく言ってくる。

「いわゆるメイドってやつか」

「それがどうしたのですか？」

「いや他意はない。ただ気になっただけだ」

「そうですか。だったら黙ってついてきてください」
こいつは俺のことが嫌いなのか？

まあ、見た感じとても真面目なメイドさんだった。いやメイドの内情など知らないが。

「ここの掃除、大変だろ？」

「・・・いえ別に」

と短く答えるだけだった。

歩きだそうとしたメイドは、振り返ってジッと見つめてきた。

「・・・あなたは」

「ん？」

「・・・いえ別に」

「いみわかんねえ」

まあ、俺もしゃべるのはあまり好きじゃない。

廊下をまっすぐ行ったり、曲がったりと何回か繰り返した後一つの扉の前に着いた。どうやらここが俺の部屋らしい。

「ここがあなたの部屋です。部屋の物は好きなように使って結構です。部屋には、電話もありそちらも好きなように使ってください。電話が鳴った時は、3コール以内に出てください。朝食は朝7時から、夕食は8時となっていますから遅れないように。遅れたら抜きにしますから」

「そんなにかよ」

「いえ、あなただけですけどね」

「おまえ、俺のこと嫌いだろ」

「・・・どうでしょう？」

「では、」

と部屋を出て行った。

「さて、どうするかな？」

と考えていると

「あ、忘れてました」

「うお！」

いきなり、部屋に入ってきたやつが。こいつただのメイドじゃねえのか。まああのお嬢様の取り巻きだから普通の奴はいないだろうが。

「これを渡すのを忘れてました」

と差し出してきたのは黒い携帯電話だった。

「なんだこれ？」

「携帯電話です。そんなことも分からないバカなんですか」

「そついう意味じゃねえ」

「・・・いいです。これも3コール以内に出てください」

「これでアダルトサイトに入ってもいいのか？」

「・・・アダルトサイトは制限されています」

「試したのか？」

「・・・どうでしょう？」

と不敵な笑みを浮かべた。

「それは外出時のときに使用してください」

「私から掛かるか、旦那さまから掛かるか・・・その辺りは、まあ色々あるんで制限はありません」

「そうか、普通に使ってもいいのか。長電話もいいのか」

「いいですが・・・友達が居ないでしょうw」

「おいこら」

「まあどうでもいいです。できるだけ使わないように」と時は言う。

「いったいどっちなんだ、と思いながら承諾した。今の金持ちはケチだな。」

「あ、そうだ」

「となんか聞こうと思って時に話しかけた時には時はもう部屋にはいなかった。」

「何なんだあいつ、忍者かよ」

「思いながら、朝から事件に巻き込まれたから疲れていたのだろう、ベットに横になると俺はすぐ寝てしまった。」

「Rrrrrrrr、Rrrrrrrr」

「電話の音で目が覚めたが、電話に出る気にはなれなかった。3コール以内に出ろって言ってたな、と思いながらも出なかったらどうなるんだという好奇心から電話には出なかった。」

「Rrrrrrrr、Rrrrrrrr」

3コール鳴っても鳴りやまない。やっぱり出たほうがいいか？いやここまで来たら出るのは辞めるか。

「R r r r r r r、R r r r r r r」

だんだんうるさくなってきた。いつそのこと電話ごとぶっ壊すか。と思っていたが、思考より体が動き電話を殴り飛ばしていた。

ゲシゲシ

最初は普通に鳴っていたが途中からジジジという音がして鳴らなくなった。

「ふう。それで俺の安眠は守られた」

「いつそのこと永眠させてやりましょうか」

「うお、いつも間に入ってきたんだよ。びっくりしたな
いつも間にか時が入ってきていた。」

「何分も鳴らしても出ないからきたのですよ」

「電話なんて鳴ったのか？全然気付かなかったが」

「何を蹴って、言っているのですか？」

「おお、なんか蹴ってたと思ったら電話だったか
と言いながらもゲシゲシと蹴り続ける。」

「電話を壊すなんて・・・」

時は呆れていた。

「で、何の用だ？まだ眠いんだが」

「旦那様がお呼びです。ただちに書齋に来いとのことですよ」

「分かった」

「でわ」

時は部屋を出て行った。

はて、書齋はどこなのか聞くのを忘れたな。まあいいかどうにかなるだろ、と思つて屋敷を回つたが逆に迷子になった。

「一体どこにあるのやら。無駄にでかいな」
ちやうど前から男が歩いてきたので、聞いてみることにした。

「なあ、そこのおっさん」

「お、おっさん？」

「そう、あんただ」

「なんだね？」

「書齋とやらはどこにあるんだ？この屋敷は広くてかなわん」

「・・・・・・」

男は黙つてきた道に戻って行った。ついてこいつてか

曲がったりまっすぐ行ったりと何回が行った後に一つの扉に着いた。

「ここだ、入りたまえ」

と案内してくれたおっさんが促した。

「ありがとう」

俺が入った後そのおっさんも入ってきた。旦那様の護衛かなと思っていた

「だ、旦那さま」

と時が慌てた様子で言った。

そこには、朱里、時、嵐、もう一人少女がいた。

「やっと来たわね」

「な、なんで海斗がここにいるんだ!」

「海斗様!？」

と三者から返事があった。

「・・・ああ。あときの少女か」

と朱里の妹、彩との二回目の出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8688y/>

ある非日常の日常

2011年12月29日00時53分発行